

若 手 競 演

——文 樂 の「廿 四 孝」評——

美 保 土 筆

晝夜二部制で氣勢を上げてゐる文樂座の四月興行、晝の部は「本朝廿四孝」桔梗ヶ原から狐火までの建てで、相變らず若手連が火花を散らして熱演してゐる。

◇…桔梗ヶ原の口は新規歸參の綾改め八十と松島の一曰交替で、流石に八十に一日ではない十日程の長がある糸は錦糸で一通りが出来、同奥（つばめ、友造）拾兒の件を語るのだが、老巧振つた巧さの割に、ハリ切りから上のツボの聲が困難で、ハツキリとしないのが取である。糸の友造、重ね撥の撥使ひが兎角目觸り、同後（演 寛治郎）眞摯で素直である何等の技巧もない終始敢闘したのが、つばめより好感が持てる糸の寛治郎、青色の冴えないのを難としても堅實。

◇…景勝下駄（七五三、友衛門）聲量も豊富だし、修

行一つで、立派な素質を持つてゐるのだが——唯大聲に喚き立てるのを自慢にしてゐるやうでは駄目である大きくしてそしてその眞髓を掴まなければネエ——景勝が一等勝れてゐる、越路の言葉は假名を読み過ぎ、慈悲藏はまだく、功果を上げる點まで工夫が至らないそれと願の使ひ方で音遣ひを上手に聴かしてやらうといふ努力と研究が未だし、糸の友衛門、冴えた青色見事な打撥、友次郎門下の逸傑である。

◇…勘助住家（大隅、清二郎）慈悲藏がズバ抜けていい、『ソレンソレまた差出るか小癪者』など寫實の妙を盡し、先代大隅を目のあたり髣髴せしめるものがある。越路も横藏もそれ／＼に面白く、お種・唐織も亦捨てられぬ風味があり、「雪やころゝん」の地合も

獨特の味があり、然には調子さへフツツかねば古靱以上の妙味を有つ太夫だのに、惜しい人である、糸の清二郎、活殺の妙、緊張した意氣込み、一撥々々も忽せにせぬ氣魄、時にハヅミ過ぎる嫌ひもあるが、兎に角快刀亂麻を斷つの慨があり、清六につぐ名手として首肯せしめるものがある。

◇…勘助物語（佳、吉三郎）スツカリ大會氣分、斯うした大物を語る用意と推敲に缺けるものがある、糸の吉三郎、濃淡活殺に不満がある、景勝上使（隅若友平）小器用に語るが、小音で引立たず、調子が上る、鐵破渡しに變つても一向氣分が轉換しない、糸の友平、何等の努力も工夫も認められない。

◇…十種舎（重、廣助）曲全體として變化は乏しいが、美聲である、兎角理屈に囚はれ勝近頃の斯道の傾向の中に、この人のみは理屈を超越して恬然と自らを楽しむ悠々たる陶醉境を作つてゐたのは懐しくも嬉しく『繪には描かしはせぬものを』『如何にお顔が似ればとや』以下さわりの紆餘曲折の妙（時には勝手氣儘な音遣ひもあるが）うつら／＼となるには持つて來

いの淨瑠璃である。糸の廣助、今度は神妙で迎も良心的、音色も殊に冴えてゐた。

◇…狐火（三瀧改め叶、清八、ツレ新太郎）古い太夫丈けにどうか自分ものにしてゐたのは偉い、時々變に言葉の語尾を張る、厭な癖は先代寫しか知らねど、こればかりは眞似て貰ひたくない、それと言葉の調子の低い事だ、殊に八重垣姫などに於ては、いよ／＼その感が深い、糸の清八、健腕に任せて時に捲れたまんま一氣に押切る事があり、ツレ彈きの新太郎もその點夢々油斷のならぬ苦勞があるやうだ。

◇…人形では八重垣姫、慈悲藏二役交替の亀松・光造の競演はどうやら光造の方に團扇が上げた、玉助の横藏、政龜の越路は一通り、榮三郎のお種が神妙可憐に遣ひ、紋司の濡衣もいよ／＼手に入つて來たやうである。

求敵必滅

輝く海軍記念日